

竹の有効利用開発を

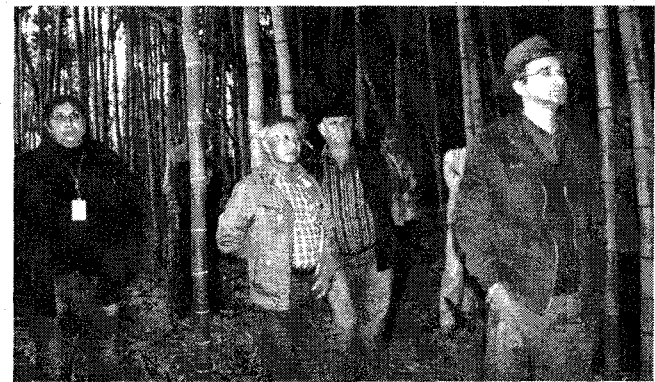
フ・ロジエリオ市で講演会 ラーモス移住地、本多氏発案で

【ラーモス移住地発】竹の産業化プロジェクトの講演会が5月16、17の両日、サンタ・カタリーナ州フレイ・ロジエリオ市役所会議室で行われた。サンタ・カタリーナ農牧拡張・研究公社(EPAAGRI)とフレイ・ロジエリオ市役所の後援。同講演会は地元ラーモス移住地の本多文男氏の発案によるもの。竹の植え付けから加工販売に及ぶプロジェクト紹介の講演会はブラジルでは珍しく、地域発展を目的とした産業形成に至るものとして地元関係者の大きな関心を呼んだ。

ラーモス移住地のあるフレイ・ロジエリオ市にはブラジル国内としては珍しく、10年以上の成竹林約50ヘクタール(主に淡竹、真竹及び若干の孟宗竹など日本種の竹)があり、これらの竹は日本人移住者が持ち込んだ。ブラジル人も含めた竹林所有農家は自家用の農業資材としては一部しか使われておらず、その利用が待たれていたという。講演会で発表された主なテーマは次の6項目。



竹の講演を行うベッケル氏 (本多泉美氏撮影)



参加者たちで竹林を視察 (本多泉美氏撮影)

- (1) 日本種の竹の高級家具材としての材質がバナナ大学などで分析試験され、その優秀さと有効性が証明されたこと。
- (2) 竹は再生可能な植物であり、樹木ではなく稲の仲間でも肥料無農薬栽培が可能なこと。また水資源の確保、土壌の流失防止など環境保全にも大きな力を発すること。
- (3) 1ヘクタール当たりの生産総重量がアメリカ松やユーカリの約1.5倍あり、植林事業としても充分な採算性が得られること。(4) 適当な間伐により良い竹を再生し、自然環境に優しい持続可能な生産物であること。また自然保護の観点から今後ますます樹木の伐採が制限される中、それに代わるものとして大きな需要が期待されること。
- (5) 高級家具・高級床材を第一目的とするほかに、竹炭(消臭、水の浄化、工芸品や炭火などの効能)及び工芸品として、また細竹や小枝はチップにしてバイオマス(飼料、特にピザ用の火力や有機肥料)として利用できるため、廃棄部分がゼロとなること。(6) 最終目標は家具工場の誘致もしくは設立

とするが、第1段階は家具材用一時加工したものを生産販売する。また加工の段階で出る廃材は地元のベレット(粉末を固めたもの)型の燃料工場に販売すること。

同計画を推進するためには、政治家、政府(市州)、農業技師、事業家、農家など多方面の人々の理解が不可欠となる。竹の農業協同組合を結成することで農業融資を得て、竹の植え付けの拡大をEPAAGRIと市役所の協力の下に早急に行っていく必要があるとし、地元では現在日系人を中心に農協結成に向けて検討中だ。

講演を行ったのはサンタ・カタリーナ州北部のサンベント・ド・スール市在住のカルロス・フェルナンデス・ベッケル氏で、現在110ヘクタール(一番古いもので6年生)の竹の植栽をしている事業家だ。7年前よりラーモス移住地に在る本多氏から竹苗の植え付けや管理を学び、その後独自に竹の研究を始めるとともに各種竹材の提供を受けてパラナ国立大学やブラジル農牧調査研究公社(EMBRAPA)で調査分析を繰り返してきた。その結果、竹を腐食する害虫や細菌を人畜無害な方法で除去する技術を確認

立。また、パラナ州サンジョゼ・ドス・ピンニャイス市在住のデザイナーで家具工場を営むロニ・セベン氏の協力を得て、今回の講演会開催に至ったという。

講演初日の5月16日は、地元市議、事業家や地域リーダー農業技師など約50人の参加者があった。翌17日は大向氏が所有する竹林を実際に視察し、約120人が参加するなど盛況を博した。会場には多数の家具材としての竹製品の見本も展示され、参加者の目を引き付けていた。

現在ブラジルで販売されている竹製品は、ほとんどが中国やベトナムなど東南アジア諸国からの輸入品となっており、同地域での今後の活動が目されそうだ。